じんけんふれあいシリーズ②
ともに生きる喜びを実感できる地域社会の実現

平成25年度人権標語優秀作品
あいさつは　差別をなくす　合い言葉

軸丸 裕輝 さん

同和問題は、放っておけば自然になくなりますか？

大分教育委員会の資料『同和問題』の中に、「同和問題は放っておけば自然になくなるものではありません。差別をなくし、一日も早く同和問題を解決して行くためには、同和問題を正しく理解すること、昔からの習わしや偏見、世間体などにまどわされずに、人権尊重の視点から見つめ直す、自分に関係のある問題として同和問題に向き合うことが必要です。」とあります。このことについて、この資料をもとにまとめました。同和問題は自然になくなるものか、考えてみませんか。

1.「寝た子を起こすな論」で差別がなくなるの？

明治政府は、1871（明治4）年のいわゆる解放令によって江戸時代の身分制度を終わらせましたが、「寝た子を起こすな」という考えで同和行政も同和教育も行いませんでした。その結果差別に対して誤りをただす取組みは、ほとんどなくなりました。そのため、社会に残った偏見は消えず差別はきびしさを増してしまいました。1922年に水平社が出来るまでの約50年間、差別事件はあいつぎ、多くの人は仕事もうばわれ、くらしもまずしくなりました。

何も知らない人が、偏見を知って間違った考えを引き継いだため、同和地区の人への差別はひどくなるばかりでした。

> うつすな！ 親の偏見 子等にまで
> （1996年人権標語優秀作品）

その後、同和行政・同和教育がはじまり、1970年代には教科書に部落問題について書かれるようになり、ひろく教えられるようになりました。それでも、1993年の全国調査によると「部落問題を知っている人」が81・3％で、そのうち「学校で学んで知った」は19％、「家族など身近な人から聞いた」が32％でした。しかも、家族などからの情報は、ひどい差別をうみだすものがほとんどでした。

2.「自分とは関係ない問題だ。」としてさけていいの？

同和問題は、「やっかいな問題だ。関わらないほうがいい。」という考えは、差別を残してしまうことになります。特定の人たちに対して決めつけたイメージによくない思いが加わるときらったり、さけたりして偏見や差別を引き起こすことがあります。「みんながそういうから」という世間ていが差別を支えています。それらが部落差別をなくすことができない原因になっています。

かつて、同和問題を口実にして、企業や公共団体にむりやりお金を出させようとした「えせ同和行為」がありました。津久見でも1977年に起こりましたが、被差別部落出身者でない人たちが部落民をかたってしていることがわかり解決しました。しかし、このような事件が、同和問題に対する誤った考えを広めてしまいました。

> 無関心 そこから生まれる 差別心
> （2008年県人教選定
> 人権標語優秀作品）

3.同和問題をなくすために

偏見は自然になくなるものではありません。同和問題に対する正しい知識を身につけ、それを自分の家族やまわりの人に伝えて行くことが、差別をなくす道につながるのではないでしょうか。

> 差別の芽
> つむ手　出す手は　勇気の手
> 赤星　静
> （2002年人権標語優秀作品）

> 偏見を　正す勇気　自分から
> 梶原　美智子
> （2006年人権標語優秀作品）